

## 論文の内容の要旨

論文題目 Fission-fusion of warring parties: the case of civil wars in Africa  
(紛争主体の分裂統合：アフリカの内戦を中心に)

氏 名 大石 晃史

現代における最も深刻な安全保障上のリスクに内戦が挙げられる。内戦は、紛争当時国の被害が甚大であるだけでなく、周辺国や遠く離れた先進国に対しても多大な間接的コストを強いるものである。今や、工学は広汎な社会問題へ適応対象を広げ、社会工学や計算社会科学などと呼ばれる分野が盛んに研究されているが、紛争はまさにこの最先端の工学研究が次に取り組むべき問題の代表と言える。

近年の紛争件研究において、内戦下における武装勢力の離合集散の重要性が注目されている。紛争主体が分裂統合することで、紛争構造が流動化し、和平交渉が困難になるため、紛争が長期化し、人道上の被害も格段に大きくなる。しかしながら、その離合集散の実態はまだ理解されていない部分が多い。その原因として、第一に武装勢力の分裂統合に焦点を置いたデータベースが存在しない。第二に、先行研究では、分裂統合の個別イベントの説明や頻度に注目が集まっており、その全体的な様相は殆ど無視されている。

そこで本研究では、国連や NGO などの調査報告書から、コンゴ民主共和国の内戦下での武装勢力がどの武装勢力に分裂・統合したのかという、武装勢力の系譜データベースの構築を行った。さらに、系譜をネットワークとして分析することで分裂統合全体の構造的な特徴を定量化した。

その結果、系譜のネットワーク特徴量は、ランダム分岐統合モデルから得られる値と有意に異なり、そこから分裂統合における国軍などの中心的な役割が示唆された。同時に、この結果は、先行研究が注目している分裂統合イベントの頻度だけでは、離合集散の様相を十分に捉えられないこと意味しており、系譜のネットワーク特徴量を利用することで、内戦下での分裂統合の紛争後社会への影響分析などをより精緻化できる可能性も示唆している。

本論文では上記研究の手法および結果を詳細に論じるとともに、社会集団の系譜ネットワーク分析という新規なアプローチのより広汎な応用可能性についても議論する。